

定義: $n \geq 1$ について, $\zeta_n = \exp(2\pi\sqrt{-1}/n) \in \mathbb{C}$ は 1 の原始 n 乗根 (i.e, n 乗してはじめて 1 になる) の 1 つであるが, $\Phi_n(x) = \prod_{1 \leq k \leq n, \gcd(n,k)=1} (x - \zeta_n^k) \in \mathbb{Z}[x]$ を円分多項式という.

注: $\Phi_n(x) \in \mathbb{Z}[x]$ であることは, $x^n - 1 = \prod_{d|n} \Phi_d(x)$ から帰納的に従う.

補題: p を $m \neq n$ をどちらも割らない素数とする. $\Phi_m(x)$ と $\Phi_n(x)$ は $\mathbb{F}_p[x]$ で互いに素.

証明: $\mathbb{Z}[x]$ で $x^a - 1$ を $x^b - 1$ で割った余りは $x^c - 1$ であることを注意する (ここで c は a を b で割った余り). よって $d = \gcd(m, n)$ とすると, $\mathbb{F}_p[x]$ で $\gcd(x^n - 1, x^m - 1) = x^d - 1$ である.

$kd = n$ とする. $h(x) = (x^n - 1)/(x^d - 1) = 1 + x^d + \dots + x^{(k-1)d}$ について, $(x^n - 1) = h(x)(x^d - 1)$ となることを注意する. $h(x)$ を $x^d - 1$ で割った余りは k で, これは \mathbb{F}_p で非ゼロなので, $\mathbb{F}_p[x]$ で $\gcd(h(x), x^d - 1) = 1$. $d < n$ と注より $\Phi_n(x) | h(x)$ なので, $\gcd(\Phi_n(x), x^d - 1) = 1$. $\gcd(\Phi_n(x), \Phi_m(x)) | (x^d - 1)$ なので, $\gcd(\Phi_n(x), \Phi_m(x)) = 1$.

系: p を n を割らない素数とし, $\mathbb{F}_p \subseteq L$ を体拡大とする. $\theta \in L$ が $\Phi_n(\theta) = 0$ であれば, θ は 1 の原始 n 乗根である.

定理: p を n を割らない素数とし, $f(x)$ を $\Phi_n(x)$ の $\mathbb{F}_p[x]$ における既約因子の 1 つとする. このとき $\deg f(x) = \text{ord}_{(\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^\times}([p])$ である (特に, 既約因子の選び方に依らない).

証明: $L = \mathbb{F}_p[x]/(f(x))$ とする. $\theta = [x]$ が 1 の原始 n 乗根であることより, $\iota: \text{Gal}(L/\mathbb{F}_p) \rightarrow (\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^\times, \sigma \mapsto d(\sigma)$ は単射群準同型である (ここで $d(\sigma)$ は $\theta^{d(\sigma)} = \sigma(\theta)$ で定まる). 一方で, $\text{Gal}(L/\mathbb{F}_p)$ は Frobenius 写像 σ_L で生成されるのであった. $\iota(\sigma_L) = [p]$ を注意する.

系: p を素数とする. 任意の $e \geq 1$ について, 位数 p^e の有限体が存在する.

証明: 前の系で $n = p^e - 1$ とすると, $\mathbb{F}_p[x]$ における既約 e 次多項式が得られる.

命題: $Q(x) = \text{Irr}(\mathbb{Q}; \zeta_n) \in \mathbb{Z}[x]$ とする (Gauss の補題より $\mathbb{Z}[x]$ に属する). p を n を割らない素数とし, $f(x)$ を $Q(x)$ の $\mathbb{F}_p[x]$ における既約因子の 1 つとし, $L = \mathbb{F}_p[x]/(f(x))$ とする. 環準同型写像 $\varphi: \mathbb{Z}[\zeta_n] \rightarrow L$ であって, $\varphi(\zeta_n) = \theta := [x]$ となるものが存在する.

証明: $L = \mathbb{F}_p[x]/(f(x)) = \mathbb{Z}[x]/(p, f(x))$ より従う (環同型 $R/(I+J) \cong (R/I)/((I+J)/I)$ で同一視している). $\mathbb{Z}[\zeta_n] \cong \mathbb{Z}[x]/(Q(x))$ と $(Q(x)) \subseteq (p, f(x))$ に注意する (ちなみに実際には \subsetneq).

系: 上の命題において, 単射群準同型 $\text{Gal}(L/\mathbb{F}_p) \hookrightarrow \text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q})$ が存在する.

証明: θ は 1 の原始 n 乗根だったから, $\sigma \in \text{Gal}(L/\mathbb{F}_p)$ は, $\sigma(\theta) = \theta^{d(\sigma)}$ なる $d = d(\sigma) \in (\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^\times$ によって決まる. $f(\theta^d) = 0$ から $Q(\zeta_n^d) = 0$ である. よって $\sigma'(\zeta_n) = \zeta_n^d$ で定まる $\sigma' \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q})$ を対応させることができる.

定理: 円分多項式 $\Phi_n(x)$ は $\mathbb{Q}[x]$ で既約である.

証明: p を n を割らない素数とする. これまで同様 $\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q})$ を $(\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^\times$ の部分群と同一視したとき, 系によって $[p] \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q})$ が分かる. よって $\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q}) = (\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^\times$ である.

おまけ：16人で麻雀大会を行う（4人でするゲームならば何でもよい）。1回戦に4組が同時にゲームを行い、計5回戦する。どの1人も他の15人と丁度1回ずつ対戦するような対戦表を作れ。

（解答） $|K| = 4$ となる体 $K = \mathbb{F}_4$ について、平面 \mathbb{F}_4^2 は16個の点からなる。これらの点を16人とそれぞれ対応させる。 \mathbb{F}_4^2 の直線は4つの点からなり、指定された傾きを持つ直線は4本存在する。原点を通る直線は $(16-1)/(4-1) = 5$ 本あるので、傾きは5種類ある。傾きごとに直線上の4点（=4人）が対戦するようにすれば、題意の対戦表を構成できる。

以下、もう少し具体的に計算していこう。まずは \mathbb{F}_4 を構成する必要がある。そのために $|K| = 2$ となる体 $K = \mathbb{F}_2$ の構成を思い出す。 $\mathbb{F}_2 = \{\bar{0}, \bar{1}\}$ で、 $\bar{0} =$ 偶数, $\bar{1} =$ 奇数 と思えるような演算法則に従う（たとえば $\bar{1} + \bar{1} = \bar{0}$ である）。次に \mathbb{R} から \mathbb{C} を構成するように、 \mathbb{F}_2 に「虚数」を添加して \mathbb{F}_4 を構成する（ただし \mathbb{F}_2 では $-\bar{1} = \bar{1}$ なので、 $i^2 = -\bar{1}$ となる i は存在することに注意）。天下降りだが、 $\mathbb{F}_4 = \{a + b\omega \mid a, b \in \mathbb{F}_2\}$ として $\omega^2 = \omega + \bar{1}$ なる法則に従うとすればよい。たとえば

$$(\bar{1} + \omega)^2 = \bar{1}^2 + \bar{1}\omega + \bar{1}\omega + \omega^2 = \bar{1} + (\bar{1} + \bar{1})\omega + (\omega + \bar{1}) = \omega$$

のように計算できる。傾きは $\bar{0}, \bar{1}, \omega, \bar{1} + \omega, \infty$ であり、

- $\{L_y^0 := \{(\bar{0}, y), (\bar{1}, y), (\omega, y), (\bar{1} + \omega, y)\} \mid y \in \mathbb{F}_4\}$ が傾き 0 の4本の直線
- $\{L_x^\infty := \{(x, \bar{0}), (x, \bar{1}), (x, \omega), (x, \bar{1} + \omega)\} \mid x \in \mathbb{F}_4\}$ が傾き ∞ の4本の直線
- $\{(\bar{0}, \bar{0}), (\bar{1}, \bar{1}), (\omega, \omega), (\bar{1} + \omega, \bar{1} + \omega)\}, \{(\bar{1}, \bar{0}), (\bar{0}, \bar{1}), (\bar{1} + \omega, \omega), (\omega, \bar{1} + \omega)\}, \{(\omega, \bar{0}), (\bar{1} + \omega, \bar{1}), (\bar{0}, \omega), (\bar{1}, \bar{1} + \omega)\}, \{(\bar{1} + \omega, \bar{0}), (\omega, \bar{1}), (\bar{1}, \omega), (\bar{0}, \bar{1} + \omega)\}$ が傾き 1 の4本の直線
- $\{(\bar{0}, \bar{0}), (\bar{1}, \omega), (\omega, \bar{1} + \omega), (\bar{1} + \omega, \bar{1})\}, \{(\bar{1}, \bar{0}), (\bar{0}, \omega), (\bar{1} + \omega, \bar{1} + \omega), (\omega, \bar{1})\}, \{(\omega, \bar{0}), (\bar{1} + \omega, \omega), (\bar{0}, \bar{1} + \omega), (\bar{1}, \bar{1})\}, \{(\bar{1} + \omega, \bar{0}), (\omega, \omega), (\bar{1}, \bar{1} + \omega), (\bar{0}, \bar{1})\}$ が傾き ω の4本の直線である
- $\{(\bar{0}, \bar{0}), (\bar{1}, \bar{1} + \omega), (\omega, \bar{1}), (\bar{1} + \omega, \omega)\}, \{(\bar{1}, \bar{0}), (\bar{0}, \bar{1} + \omega), (\bar{1} + \omega, \bar{1}), (\omega, \omega)\}, \{(\omega, \bar{0}), (\bar{1} + \omega, \bar{1} + \omega), (\bar{0}, \bar{1}), (\bar{1}, \omega)\}, \{(\bar{1} + \omega, \bar{0}), (\omega, \bar{1} + \omega), (\bar{1}, \bar{1}), (\bar{0}, \omega)\}$ が傾き $\bar{1} + \omega$ の4本の直線

となっている。以上より、 \mathbb{F}_4^2 の点 $(\bar{0}, \bar{0}), (\bar{0}, \bar{1}), (\bar{0}, \omega), (\bar{0}, \bar{1} + \omega), (\bar{1}, \bar{0}), (\bar{1}, \bar{1}), (\bar{1}, \omega), (\bar{1}, \bar{1} + \omega), (\omega, \bar{0}), (\omega, \bar{1}), (\omega, \omega), (\omega, \bar{1} + \omega), (\bar{1} + \omega, \bar{0}), (\bar{1} + \omega, \bar{1}), (\bar{1} + \omega, \omega), (\bar{1} + \omega, \bar{1} + \omega)$ をこの順に A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P とすると、題意の対戦表は以下のようになる。

1回戦 (A, E, I, M), (B, F, J, N), (C, G, K, O), (D, H, L, P)

2回戦 (A, B, C, D), (E, F, G, H), (I, J, K, L), (M, N, O, P)

3回戦 (A, F, K, P), (E, B, O, L), (I, N, C, H), (M, J, G, D)

4回戦 (A, G, L, N), (E, C, P, J), (I, O, D, F), (M, K, H, B)

5回戦 (A, H, J, O), (E, D, N, K), (I, P, B, G), (M, L, F, C)

（コメント）以上の論理で重要なのは \mathbb{F}_4 の存在である。 $|K| = n$ となる体は $n = p^e$ のように、 n が素数べきの場合にのみ存在することが知られている（ガロア体、有限体）。よってこの構成法は、麻雀以外にも、たとえば3人、5人、7人、8人、9人でするゲームに適用できる。6人でするゲームには適用できないが、その場合、そもそもこのような対戦表が存在しないことを証明できる。